

Newsletter 4

February 2025 no. 4

CCI 文部科学省科学研究補助金
基盤研究 (S)

アフリカ狩猟採集民・農牧民の
コンタクトゾーンにおける子育ての
生態学的未来構築



CCI Grant-in-Aid for Scientific Research (S)



Ecological future making of childrearing in contact zones between hunter-gatherers and agro-pastoralists in Africa

目次 Contents

インタビュー

特集メンバー 川島 理恵, メンバー マシュー・バーデルスキー	03
--	----

活動報告

紙芝居プロジェクト	10
海外派遣報告	11
主な業績	12
受賞 / 関連イベント	14

事務局より / 表紙を語る	16
---------------------	----

インタビュー 特集

メンバー 川島 理恵 メンバー マシュー・バーデルスキー

(インタビュアー:高田明,山本 始乃)

研究内容について

山本：研究内容について教えてください。

川島：主にヘルス・コミュニケーションで会話分析を使って、色んな医療現場の分析をやっています。救命やプライマリーケア、遺伝カウンセリングなど若干シリアスな、交渉が必要になるような場面の研究をしています。子どもの研究も行っていて、高田先生と一緒に日本の子育てデータの分析をさせていただいています。

バーデルスキー (以下マット)：会話分析と言語社会化を組み合わせた形で親子の会話やペア同士の会話、家庭だけではなく学校、保育所とか幼稚園とかでデータを収集しています。

基盤Sとの関わりについて

山本：子どもや会話、相互行為といった部分で共通点があると思うのですが、基盤Sとの関わりについて教えてください。

川島：今までの子ども－養育者の関わりの中で、マットとも（この共同研究とは）違う場面で着目してたのが story telling という場面です。物語を語るということが様々な場面でどのようなことを意味するのかというような分析を今までは日本の子どもや他の場面で行いました。以前、マットとは全米日系博物館 (Japanese American Museum) における日系の方の story telling で、ガイドツアーでどういう語りが行われるかを一緒に研究させていただきました。そうした物語の構築と基盤Sで行われている紙芝居のプロジェクトは将来的に関わってくるのではないかと思います。（狩猟採集社会で行われている紙芝居の）データを楽しみに待っています。story telling って色んな場面で行われる活

動です。私も他の医療データ等で、何かを説明したり、分かりやすく伝えたりというようなことが、「こういう風にしてね」と言うだけでなく、それを物語に埋め込むみたいなのがどういう意味を持つのかとか、例を出して説明を分かりやすくする時にその例がどういう意味を持つのかみたいなのを、制度的な会話の中でも研究しています。そういった取組が今後、基盤Sの研究に役立てばいいなと思っています。

(中略)

高田: story telling の話で、人類学の民話の語り (Folk tale) も昔からのテーマです。紙芝居でもそういう民話を取り上げているので、紙芝居的にしたものとか、昔ながらの焚火を囲んでおじいさんが語ったものとか、色んなバージョンが収録できていて、すごく古い問題意識を新しい手法で研究できそうだなというのは感じています。

マット：今は外での散歩についても研究しています。外に行って子どもたちが動いている鳥とか地域の猫、あるいは動いていない自動販売機とか自分にとっては意味のある、色々気付いたものを指差す。自分から気付きを開始して、誰かの注意を引いて、それに対してコメントしてもらう。もし無視されたりする場合、「先生、先生!」と呼んだり、声を大きくしたりしてもう一回返答を追求する。一つの方法論にも関連するかもしれないのですが、(これまでの) 多くの制度的な場面での研究は建物の中で行われてきました。一方、基盤Sや私のこれまでの研究のいくつかは、外に行ってジャングルの中での子どもたちの冒険とかペア同士の会話とかそういったものを観察します。そういう所が一番関連しているのではないかと思います。さらに、言葉だけではなく、対象者が何を見ているのかとかマルチモーダルな会話分析の問題とか、他にも何人かの研究

者がやっているような観点からそれを分析していくことにも意味があるのではないかと考えています。それは研究者にとってすごく大変なことです、付いて行かないきゃいけないので。子どもたちが今何をしてるのか、自分の身を守りながらこけたりとかしないように、カメラをもちながらやっています。本当に危険なので、2人でやった方が安全だろうということもあります。僕もこけたことがあります。

川島：マットがやってるの？

マット：僕はコロナ前のデータですが、4年前に大学の近くで撮ってました。もう一つは、日本語が母語の子どもたちだけでなく、日本語を第二言語として使用している子どもたちの研究です。子どもたちは本当に日本語がゼロなので自分の母語で言葉を言ったりしています。例えば、散歩中にバングラデシュ語で「ガリガリ」と言っていて、誰も最初はガリが何か分からないけども、1～2週間経っていくとガリが車だってことを皆が認識してて、同じように他の子どもたちも「ガリガリ」って言う。そしていつの間にかガリが日本語の車に変化されるんだけど、最初は自分の母語でも、自分と相手の離れたものでも注意を引く。トマセロがやっているような（中略）ジョイントアテンションのエコロジカルシステムと、もうひとつの3つの視点が関連しているかどうかは分からないけども、興味ある所はそこです。散歩は移動していくので、だんだんと環境が変わっていく。家の中だったら限定されているけど、移動すると目に入ってくるものも変わってくるし、遠い所にあるものから近い所にあるもの、動いているものとか子どもたちは興味あるし気付く。カラスとかいきなり指さして、「あ、カラスいるんだ」とか。だから言葉無くても参加できる、参与できるような。

川島：CCIのデータでも散歩の妊婦さんと、お兄ちゃんとかお姉ちゃんと散歩に行ったりするシーンがあって、ああいう時に気付きの発話から始まって経験語りみたいなものになるようなところとかすごく面白いなって思う。

マット：そうなんだよね。あとそういうのもすごく、間主観性に関連していると思う。相手に自分が何につ

いて思ったのか／いるのかを理解してもらおう。会話分析の修復とか結び付けられてると思うんだけど、ああいう所でも見ておくとすごく間主観性ができているなと思ったりします。

川島：そうだよ。

高田：共通のものとか環境っていうのをグラウンドにしてインタラクションが成り立ってという図式が大事ですよ。

マット：そうそう。何か子どもがそれを開始するってのが面白い。自分からそれを何か、「いたんだ！」とか「猫ちゃん！」とか。いきなり指差しが先、ケンドンが言ってるような動きが先で、言葉が後から「あっ」とか。だからそういう所から見えています。

川島：気づきの前ってさ、インタラクションの動きがとまって、気が付きが無い状態の気づきの時もあるけど、オンゴーイングであって気づきの時もあると思うんだけど、オンゴーイングの時の気づきがあったら面白いよね。

マット：そうだよ。

川島：なんで私がそれを言っているかという、怒ったり、子どもが何か注意されたりしている時にシフトアテンションみたいな感じで、怒られているアクティビティから全然違うアクティビティに行くために「あ」みたいな。散歩していると「行っちゃだめ」とか、そういうルールみたいなものもあるだろうし、そういうものとかと絡めて研究すると面白いだろうなと思いました。

高田：ディレクティブの研究の時に。

マット：そうそう。もちろん一番大事なのは安全なので、それがガイドしているわけじゃん。それ気付くってことはもしかしたら危ないかも。「車」って言ったら車来しているかもしれない、じゃあ皆どけなきゃいけないっていうこともあるし、あとは鳥がいるとか、それは関係なくただ歩いている、安全な場所で歩いているからそれができる。「危ない、危ない！」って言ったらそういう気づきがメインアクションにならない、無視され

ちゃうかもしれない。あと、連鎖みたいに誰か気付いたものから開始されて、後から別の子が別のものに気付くとか、次の子が気付いて大体円みたいになっている。15分くらいなんか今度は何？みたいに。

高田：気付きの連鎖がある。

マット：気付きの連鎖みたいに、一つだけで終わってしまう場合もあるし、次から次へっていう。

川島：そこにゲーム性みたいな、お散歩の中のその楽しさの中の一つが、お互いが何か見つけごっこじゃないけどそういう包容性がある。それが連続するとそういうゲーム性があるんだけど、一つの気付き、それが単独だったらならないんだよね。

マット：そうそう、それを誰が開始するのか。大体最初は、保育士が「〇〇だ」と言うんだけど、それが子どもからスタートラインで大体20分くらい歩いて行くわけだから、その中で何回も何回も見られる、それが面白い。

高田：このプロジェクトとしても、まあ僕自身はずっとフィールドワークで environmentally coupled gesture, interaction みたいなものとか、way finding のような動きながらやる interaction on the move ーみたいな話をしてきました。特にこのプロジェクトに関してはプロジェクトのタイトルも ecological future making ってなってるんですが、狩猟採集民が定住化するときに環境がガラッと変わった状況に注目しています。環境を利用して interaction が進むって言うのは一般的に言えることだと思います。ただこのプロジェクトの対象社会はどこも、すごく変わってしまった環境の中で、社会が再編しないとイケないような状態にあります。そこで、ほんとに動きながらの interaction とか環境に対しての気付きは、プロジェクトとしても面白いポイントのひとつです。さっきのバングラデシュのように異言語とか異文化との出会いっていうのも、その点では面白いですね。このプロジェクトではコンタクトゾーンがキーワードになっています。主には狩猟採集民と農牧民のコンタクトに焦点をあてていますが、プロジェクトとしてはさらに広くコンタクトゾーンについて考

えてみたいと思っています。異質なものが出会った時に特に子どもとか養育者っていうのがそれをどういう風に自分たちのインタラクションに取り入れて行ったり、既存のものに再編する／していったりっていうのが関心の中心です。その点では、マットが先に述べた車のデータの話も聞きたいですね。

マット：空間のとらえなおしが、大きなテーマとしてあるかなと思います。あと、アクティビティもあるじゃない、食事の時とか、遊びとか。歩いているっていうのは、活動ではなく、活動Aと活動Bの間ぐらい、traditional space みたいな。そういうスペースの中で間主観性を作り上げたり、結構言語社会化ができたりしているかなという気がする。だからそれは（これまでの研究では）あまりフォーカスされていない。（本プロジェクトの海外研究協力者でもある）エレノア・オックス先生たちは、食事であったり、ある開始の時だと読み聞かせの大体最初と最後の boundary activity で、眠るスペースはあんまり始まりと終わりははっきりあるんだけど、けど少し普通のアクティビティと違う気がする。

（中略）

お世話になった先生について

山本：3人はこれまでの研究でも長らくお付き合いされていると思いますが、これまでお世話になった方などはいらっしゃいますか？

高田：この間、亡くなった Emanuel Schegloff 先生ですかね。

川島：会話分析の創始者の1人の Emanuel Schegloff (2024年5月に逝去)。マットも（彼の授業）取ってたよね、一緒に。

マット：その授業で知り合ったんだ！あれ、Schegloff, 怖かったんだよね、最初は。

川島：そうそう（笑）

高田：怖いけど、すごいメンターシップみたいなのが

あって、やっぱりこう学んでるって感じはする。

マット：いつも宿題というか。

川島：そう。

マット：ラボに行って、データを聞いてトランスクリプションをせずに分析しないとけなかった、だからすごくトレーニングされているような。

川島：あれはすごくいいトレーニングだったよね、同じデータで。でも衝撃的だったのが、あの時でさえ30年前？1970年代くらいのデータだったのかな、materialsとしてあるのは、それをずーっと、fresh！みたいな感じで。データセッションみたいな感じだと「はあ！今気付いた！」みたいなことをバーってしゃべってて、30年前に撮ったデータをそんなにフレッシュな目で見ると、よくマニーとかデータセッションとかの時に「僕は先生だから、authorize to say the right things」じゃないみたいなことをすごく言って、誰でもデータの前では平等だからって何回も言ってるのを覚えてます。そのequalityを保ちつつ、かつ30年前からずっと見てるデータに対してfreshなobservationをその場でprovideできる、そのマニーのフレッシュな気持ちでデータに接してたマニーの偉大さを今、改めて、失いたくない部分として思い出すことがすごく多い。

(中略)

マット：マニーのレクチャーみたいなやつ、そのままだったんだよね、このまま手を使ったり。

高田：あのビデオで使ったときは、川島と僕が出席してた時で。

川島：そうそう。ビデオ撮ってた時で、多分マットの時が1年、私たちは2回か3回くらいとれて言われて、2年目で取ってる時に明さんが来て、そのずっと後ろでずっとビデオで撮ってて。私2年目なのにまだ全然分からなくて、2回目のレクチャーでもなんでかわかんないって思ってずっと「はい！」って(挙手して)、後ろにビデオあったのにそんなの何も考えないで挙手して聞いてたの。そしたら何年か経って何かの集まりに行った時にそのレクチャーを見てた学生が

「あの理恵？あの理恵??」とかって。「もしかしてあのマニーの授業で手上げてた理恵？」みたいな。

マット：あれは学部生と一緒に出てたやつだから、それもちよっとびっくりした。学部生ちょっと後ろの方に座って、我々院生が前3列くらい。

川島：そうそう。後ろの方、院生がずらーっと。

高田：でもねー。この間の(2024年6月にSeoulで開催されたThe International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysisの)パーティーの時もみんなが語る思い出が結構似てるんやなって思ってやっぱり、マニーはマニーだなって。

川島：今、先生になって、マスター書いた時とかデータのアナリシス持って行った時とか、line by lineで直されて、2時間とか1週間に1回ずつちよっとずつ持って行って書き直して書き直して…ってずっとやってっただけけど、あんなことマニーよくやる時間あったよね。writingもしててresearchもしてて。

マット：あれは多分わかんない、学生のTAの方もしてくれていたと思う。大学院生のものまでやったかどうかはわかんないけど。

川島：そう、なんか、今考えるとあんなになんで時間取ってくれたんだろう、取れたんだろうマニーはすごいなあって思う。

マット：後言わないといけないのはCharles Goodwin。もう5~6年前に亡くなって。

川島：もう本当にお世話になって。

マット：僕にとってはGoodwinの存在が大きい。4年間ずっとそこのラボに行ってたから。僕にとっては世界が変わった、っていう。

川島：あのキャラはもう、というか唯一無二というしかない。

高田：よく聞くと意外と毒舌だったりもする。

川島：時々ね(笑)結構ドライだったりする時もある。でも、非常にエンカレッジ風で、チャックがしゃべっ

ている時は「自分のデータなんでこんなに面白いことに気付かなかったんだろう！」って思うの。「わー！すごいね、こんなに面白い！わー」って言うときは、「すごいデータなんだ！」って思うんだけど、帰ってさあいざ書こうってなると「何がおもしろいんだっけ？なんて書きゃいいんだ！」って（笑）

マット：あの時はテープカセットとか、IC player とかなかったから、カセット持ってきて（笑）

高田：マニーもチャックもすごい先生だけど、発想の仕組みが違うというか。チャックは色々な所にコネクトしながらまた違う所に飛んでいく感じ。マニーはすごく整理された経典がマニーの背後にある感じがして。その違いはすごく感じたかな。行くたびに新しい枠組みを提供してくれたり、チャック自身もそれを見つけて出したりしてるんだろうなと感じる所はありました。それにみんながアトラクトされてやってみようとするけど、自分ではなかなかできないという。

川島：そうです。

（中略）

高田：どの時代にいるか誰に会うか、って結構偶然の要素もあるけど、それによって自分の興味とかが作られていくこととかキャリアが変わってっていうことがあるから大事ですよ。出会いを大事にして研究を続けていくっていうのは。

基盤Sの発展に向けてのアドバイスをください

高田：このプロジェクトで言うと、子どもと養育者の関わりにはずっと注目しています。子どもはとくに0歳から5歳まで。日本でやってきた研究をもちろん引き継いでいるけど、それをアフリカの全然違う、学校も教室の中じゃない活動がすごい多いような環境だったりとかで見えています。そういう環境では、外にあるようなものが遊びのおもちゃになっている。もともとは、子ども向けのおもちゃじゃないものです。いまプロジェクトで取り組んでいる紙芝居なんかももともとは現地の民話です。口承の語りでみんなが受け継いで

きたようなものが今廃れつつあるのでそれを紙芝居にしています。産業社会とはすごく違う環境で子ども養育者の相互行為がどうやって組織化されるのかに注目しています。みなさんから、色々な示唆をいただけたらなと思います。

川島：私がアフリカの話聞いてて思うこと。

高田：川島さん一回行ったこともあるからね。

川島：（ボツワナのフィールドに）行きました（笑）なので思うんですが、社会的な変革っていうのを経験しているグループだと思うんですね。住む場所だったり、価値観だったり、仕事だったり、子育ての方法もおそらく少しずつ変わってきている中で、変化っていうものがどこで見えて、どういう風にスタートされるのか。私も色々な制度的なものが変わっていくとか、今までできなかったことができるようになってとか、そういう変革っていうものが人と人とのコミュニケーションだったり、関わりにどういう風な形で表れてくるのか、に関心を持っています。自分の（別プロジェクトで扱っている）関わり、医師と患者の関わりもどんどん変わっていています。新しい技術などがどんどん投入されてたときにどういう説明がなされるかっていうようなことも（関心が）あるし、そういう変化みたいなものが及ぼす…どっちがどっちかはちょっとあれなんですけど。マテリアルがあるからインタラクションが変わっていくのか、インタラクションが変わったことによってマテリアルがうまく活用されているのかは、どっちが先かは分からないのですが（笑）そういう社会の変革と相互行為みたいなものは一般的に共通してデータの中で見えてくるものなのかなと思っています。この基盤Sってアクションリサーチをするっていう目的でやっているの、それって既存の物に何か新しいものを導入するっていうことが目標になっていると思います。そういう変革だったり変化を促すっていうことが、相互行為を観ることでスムーズにうまくいくやり方みたいなものもあるんじゃないかと思っていて。社会が変わるきっかけっていうのは、私は、コミュニケーションから変わっていくと思っているんです。なので、その変革みたいなものがどこに表れていくのかっていうものは、今後はアクションリサーチをしていく中で、

何かアイテムがイントロデュースされたり、されるようにうまく整えるみたいなやり方の中に、そういうコミュニケーションの研究が生かされていけばいいなという、そういうような研究がどんどん広がって行ったらいいなという気はしています。

高田：マットとの関連で言うと、Language Socializationはこのプロジェクトでも重要な理論的な軸です。たとえば、(Language Socialization 研究を推進してきた) エレノアたちが言っている micro-habitat っていうのは申請書の段階から中心概念の一つに位置づけています。規模は違うけど、日本に比べれば自然環境の中に目に見える形で出来上がっている村みたいな所を対象にして、その中で起こっている言語社会化っていうのを環境と関連付けた形でみながら、その中で彼ら・彼女らの habitus がどうやって出来上がってきているのかっていうことを考えたいっていうことが基本アイデアです。日本で考えたことが砂漠や熱帯林の環境の中でどういう形をとっているのか、日本と似たような形があるのか／無いのかっていうのは考えられるのではないかなと思っています。それこそ、動物とか植物との関わりっていうのは、日本の特色ってのもあるだろうけど、アフリカ狩猟採集民や牧畜民の特徴っていうのも面白いでしょう。

マット：共通点と相違点というか、アフリカと日本の共通点は何なのかとか、そういうのも。例えば story telling のテーマでいくつかの日本だけでなく、中国とかアメリカとかアフリカとかどうなってるのかっていう共通点を、人類の中でこう文化とか違うんだけど story telling は story telling という構造があったり、参加の仕方があったりとか、そういうのをやっていくと面白いと思う。そういう共通点を見つけ出すというのが面白いなと思います。今、日本もそうだけどテクノロジーとかスマホとか子どもでも持っているんで、アフリカはどうなってるのか、変わってどうコミュニケーションしてるのかとか。相違点はいっぱいあると思うので、共通点は何とかか。アフリカとかスマホとか子どもどう？

高田：(アフリカでは) スマホは割と早く導入されています。

マット：じゃあそこから共通点が見えてくる(笑)

高田：あと、チャックが言う、environmentally coupled gesture っていうのはまさに、環境の中で色々な interaction をしている、たとえばカラハリの環境の中で野生動植物を求めて移動して、それを食べてっていう生活をしている人なので、アメリカのデータや日本のデータを見るより、より切れ味するどく使えるなと思っています。チャックのメモリアルの論文集では、僕はその概念を使って論文を書いたのですが、そういう意味では色々な発想が繋がる考察のポイントになりますよね。

マット：僕ら何年前に子どもが泣くことについて特集*出してて、ニュージーランドとかスウェーデンとか日本とか、そういう特集とか(をこのプロジェクトでも組んだりすると) 学ぶことが多いなって気がする。泣くっていうその普遍的なことなんだけど、どの社会でも対応の仕方がやっぱり文化によってちょっと変わったりすることもあるし、でも共通点がいっぱいあるので、じゃあそれは何なのかとかを考える必要があるなあと(思います)。言語形式もまあマックス・プランク研究所でもクエスチョンとかいろんな言語の観点で比較研究をやってたけど、我々に何ができるか。文法形式とかだけでなく、違うアクティビティ(を比較する)とかそういう観点からがいいかなと思います。story telling も一つの代表的なものではあるけど、散歩とか食事とか色々なアクティビティがあると思うのでそこから何が言えるのか。もちろん会話分析の手法を使って。会話分析を使わないとミクロなレベルでは何も言えないと思うので。それはメゾレベルとマクロレベルで言ってるのか、アイデンティティの形成とかルールとかモラルティとかとどう関係しているのか。それらを通じて、会話分析を越えた研究を目指せるといいですね。

高田：ありがとうございます。

マット：会話分析を大事にしながら、でもメゾレベルとかマクロレベルでももう少し大きなことが言えるのではないかな。人類とは何かというところを。

川島：でもそういう人類の共通点みたいな、human

nature というか、インタラクションの中に見えるそういうエッセンスが何か見えたなら楽しいなと私は思う。違いを語るのもいいけど、共通点を語ることで、what we are という所がもう少し見えたなら、マニーが言うようなニューヨークからカリフォルニアへの一歩のそのもうちょっと先みたいな (笑)

高田：逆じゃないの？ (笑)

川島：逆？あれ逆？ニューヨークからカリフォルニアじゃなかった？なんか、「(会話分析の研究の展開において) 僕たちはニューヨークからカリフォルニアへの第一歩を踏み出したに過ぎない！」ってずっとレクチャーで言っててさ、第二歩目は何だ？シークエンス・オーガニゼーション (Manny Schegloff の代表的な著書) の次？みたいに思ってたけど (笑) でもそういうような、次に繋がるような仕事ができたらいいですね。

* Asta Cekaite and Matthew Burdelski (eds.) 2021. *Journal of Pragmatics (Special issue: Pragmatics of crying in adult-child interactions: Interactional responses to distress)*, 181. (<https://www.sciencedirect.com/special-issue/1073HKV2WVQ>)

(2024年7月12日 インタビュー実施)



川島 理恵 (かわしま みちえ)

京都産業大学国際関係学部・准教授

主たる研究領域：制度場面の会話分析



マシュー・バーデルスキー

(Matthew Burdelski)

大阪大学人文学研究科日本学専修

日本語学講座・教授

主たる研究領域：言語イデオロギー論

インタビュアー

高田 明, 山本 始乃

(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究
研究科)

紙芝居を通じてクン・サンの民話を再活性化する

高田 明 (京都大学大学院・アジア・アフリカ地域研究研究科)

NewsletterのNo.1で紹介した『ツチブタ女の物語』(ガイ (G|ui)・ガナ (G|ana) の民話), No.2とNo.3で紹介した『水の話』(バカ (Baka) を主たる対象とした水衛生に関する啓発的物語り)に続き,「紙芝居プロジェクト」の第3作目として企画を進めている,『オオトカゲの赤ちゃん』について紹介します。この話は,ナミビアの狩猟採集民として知られるクン (!Xun) の民話『Two sisters find a baby who becomes a monitor lizard』に基づいています (Heikkinen 2011)。Tertu Heikkinen はフィンランド出身の宣教師/言語学者で,ナミビア北中部においてクンなどを対象とした活動にその生涯を捧げました。上記の『Two sisters...』も彼女が記録したクンの民話の一つで,そのあらすじは以下のようなものです:

2人の姉妹が採集活動のために土中に穴を掘ったところ,そこで赤ちゃんを見つけた。2人は赤ちゃんを家に連れ帰ったが,赤ちゃんは泣いてばかりいた。しばらく経った嵐の日,姉妹は家を逃げ出した。赤ちゃんはオオトカゲに姿を変えて,姉妹を追いかけていった。姉妹は砂を投げつけてオオトカゲを動けなくし,難を逃れた。

クンが(再)創造してきた多様な民話には,クンの世界観やその背景となっている生活環境が良く現れていると思われます。その一方で,狩猟採集活動をして暮らしていたクンでは1960年代頃から定住化・集住化が進み,現在のクンはおもに政府の開発活動やトウジンビエの農業によって暮らすようになっています (Takada 2022)。それに伴って,民話を語る社会的な状況も大きく変化し,その機会自体が失われつつあります。本プロジェクトでは,そうした民話を紙芝居という日本で発展してきたメディアの形式と融合させつつ,再活性化することを試んでいます。作画では,しろねこ書房の中山恵美さんのご尽力をいただいています (図1)。今後は現地調査を踏まえながら,作品としての完成度の向上や上演場面の分析を目指して活動を展開し,そのプロセスについても紹介していく予定です。

参考文献

- Heikkinen, T. (2011). *Hai//om and !Xū Stories from North Namibia* (Edited by S. Schmidt). Cologne, Germany: Rüdiger Köppe Verlag Köln.
- Takada, A. (2022). *Hunters among farmers: The !Xun of Ekoka*. Windhoek: University of Namibia Press.

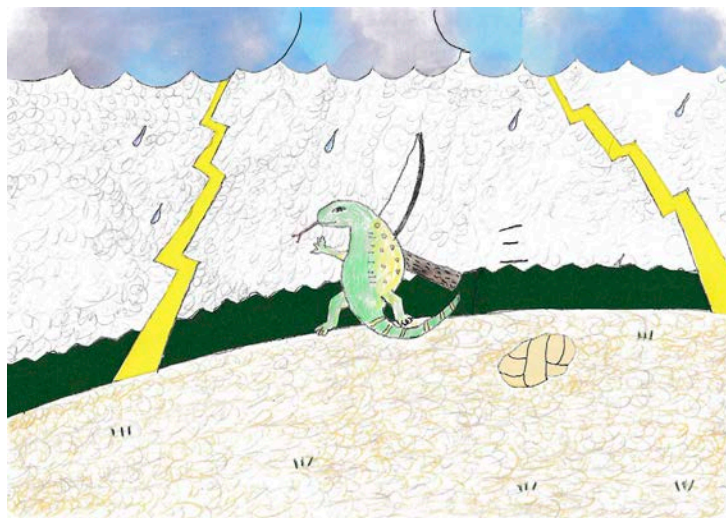


図1 『オオトカゲの赤ちゃん』より, 姉妹を探しに行くオオトカゲ (作画: 中山 恵美)

海外派遣報告 2024.10-11

高田 明 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 教授)

派遣先: ナミビア / 派遣期間: 2024/10/18 - 11/3



ナミビア大学の美しいキャンパスにて、左から ASAFAS 大学院生の山本始乃さん、報告者、ナミビア大学の Martha Akawa 上級講師、Romie Nghitevelelewa 講師、ASAFAS 大学院生の胡柳さん。



幼稚園に付設されたトイレ。村でのサニテーションの状況についての調査は今後の重要課題の1つである。

ナミビアのナミビア大学、JICA ナミビア・オフィス、在ナミビア日本大使館、オシャナ村、エンドベ村、オナンジョコエ医療博物館、ナミビア国立資料館・図書館などを訪問し、本プロジェクトに関する研究打ち合わせ、資料収集、現地調査などを行った。今回は短期の滞在であり、とくに直近の南部アフリカ滞在（令和6年8月1日から9月6日）においてやり残した基盤研究S「アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築」を推進していくための組織体制づくりに力を入れた。



オナンジョコエ医療博物館のオフィスの前にて、Kleopas Nghikefelwa 氏。彼は多才かつ豊富なアイデアを持っており、本プロジェクトでのキーパーソンである。

詳細：派遣報告一覧



主な業績

論文・論考

Habtu, Y., Kumie, A., Selamu, M., Harada, H., Girma, E. 2024. Prevalence and determinants of occupational depression, anxiety, and stress among Ethiopian healthcare workers. *Scientific Reports* 14, pp.1-17. <https://doi.org/10.1038/s41598-024-72930-x>

橋彌和秀. 2024. 「教え・育て」と「教わり・育つ」の対立と均衡点: ヒトの適応戦略としての教育とその心的基盤『教育哲学研究』129. 7-13頁.

Hewlett, B., Boyette, A. H., Chellan, V., Dira, S., Fouts, H., Hill, K., Jang, H., Kakkoth, S., Noguchi, T., Omura, K., Schniter, E., Takada, A., Chaudhary, N., Salali, G. D., & Sugiyama, M. S. 2024. Introduction: Stepfamilies, adoption and other forms of the family in hunter-gatherers. *Hunter Gatherer Research*, 9(3-4), pp.209-236. <https://doi.org/10.3828/hgr.2024.26>

河本裕子. 2025. 「焼畑用地選定時における熟練者の視線」『生態人類学会ニュースレター』30. 61-65頁.

Masse, M. C. O., Sonfo, T. A. N., Yasuoka, H. 2024. An assessment of forest use and its benefits on livelihoods: A case of the Baka and Bantu communities, Southeast Cameroon. *Forest Policy and Economics* 169: 103344. <https://doi.org/10.1016/j.forpol.2024.103344>

Nitta, H., Uto, Y., Chaya, K., Hashiya, K. 2025. Self-face processing in relation to self-referential tasks in 24-month-old infants: A study through eye movements and pupillometry measures. *Consciousness and Cognition* Volume 127, <https://doi.org/10.1016/j.concog.2024.103803>

Takada, A. 2024. Doing being senior/junior: Reconsidering naming and kinship relationships among the !Xun of north-central Namibia. *Nordic Journal of African Studies*, 33(4), pp.406-416. <https://doi.org/10.53228/njas.v33i4.1147>

Takada, A. 2024. The formation of natural persons and diversity of attachment relationships in hunter-gatherer child-rearing. *Hunter Gatherer Research*, 9(3-4). <https://doi.org/10.3828/hgr.2024.37>

Takada, A., Noguchi, T. 2024. Diversity and transition of stepfamilies among the G|ui and G|ana. *Hunter Gatherer Research*, 9(3-4), pp.385-395. <https://doi.org/10.3828/hgr.2024.21>

高田 明. 2024. 「他者と同じように行うこと: クンの養育者=乳幼児間相互行為の分析から」『国立民族学博物館研究報告』49(1). 67-92頁.

田中文菜. 2024. 「書評『狩猟採集社会の子育て論-クン・サンの子どもの社会化と養育行動』(高田 明 著, 京都大学学術出版会)」『アフリカ研究』106. 54-56頁.

Zaman, M. N. U., Sai, A., Nyambe, S., Yamauchi, T. 2024. Parental education, embarrassment, and sanitation facilities influence menstrual product choices among female nursing students in Bangladesh. *Journal of Water, Sanitation and Hygiene for Development*, 14(10), pp.1003-1016. <https://doi.org/10.2166/washdev.2024.226>

書籍 (単著, 編著)

Dan-Glauser, E., Kohn, N., Takada, A. (Eds.). 2024. Emotion socialization collection. *Scientific Reports* 14.

Takada, A. 2024. Discourses of Qualitative Research Quality in Anthropology: Challenges of Cultural and Linguistic Anthropology. In U. Flick (Ed.), *Sage Handbook of Qualitative Research Quality*. London: Sage Publications, pp.152-165.

高田 明. 2024. 「物語りと感情: グイ/ガナの場所をめぐるトークの分析から」田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝 (編)『動的語用論の構築へ向けて』第4巻. 開拓社, 154-173頁.

安岡宏和. 2025. 「バカ・ピグミーの星はホタル?」後藤明(編)『星の文化史: 世界13地域における星の知識・伝承・信仰』丸善出版, 104頁.

安岡宏和. 2025. 「中部アフリカにおける野生肉危機と持続的狩猟のアカウンタビリティ」『森林環境2025』67-78頁.

安岡宏和. 2025. 「森の〈歴史〉に参加する: キャンプ跡の幼木との出会い」『ザ・フィールドワーク: 128人のおどろき・とまどい・よろこびから広がる世界』京都大学学術出版会, 128-129頁.

その他刊行物

今川恭子, 市川恵, 伊原小百合, 長井覚子, 高田 明. 2024. 「共同企画X ラウンドテーブル: 音楽的社会的展望: 子どもの音楽的発達を捉える思考枠組をめぐって」『日本音楽教育学』53(2), 96-97頁.

基調講演・招待講演

原田英典. 2024. 「グローバル WASH 普及目標と WASH システムの課題と展望」JICA 地球環境部水資源グループ Water, Sanitation and Hygiene (WASH) 勉強会. 東京. 2024年10月22日.

原田英典. 2024. 「アジア・アフリカの水・衛生-サニテーションの価値-」高大連携の一環としての膳所高等学校生徒向け公開講座. 大津市. 2024年12月19日.

橋彌和秀. 2025. 「赤ちゃん・子ども研究への招待: コミュニケーションとこころの発達へのアプローチ」西南学院大学(福岡市). 2025年1月16日.

橋彌和秀. 2024. 「内なる目」と「外なる目」との接続可能性-ヒトの目の外部形態の進化を巡る議論と展望」第29回日本顔学会大会特別講演. アイーナいわて県民交流センター(盛岡市). 2024年11月2日.

橋彌和秀. 2024. 「せんせいは赤ちゃん~乳幼児のこころとコミュニケーションの発達~」福岡市保育協会. 保育研修会講演. 福岡市市民福祉プラザ(福岡市). 2024年7月9日.

服部 楓, 宮内翔子, 橋彌和秀. 2024. 「非言語音に対する音声言語表現の収斂過程」日本行動進化学会第17回大会. 広島修道大学(広島市). 2024年12月7-8日.

服部 楓, 宮内翔子, 橋彌和秀. 2024. 「慣習的なオノマトベ語彙表現がない非言語音を言語化する方略とその発達の变化」日本心理学会第88回大会. 熊本城ホール(熊本市). 2024年9月6日.

岸本励季, 橋彌和秀. 2024. 「情報伝達における情報の抽出と圧縮方略: 伝達相手の年齢による影響(研究計画)」日本人間

主な業績

行動進化学会第17回大会・広島修道大学（広島市）. 2024年12月7-8日.

Yamauchi, T. 2024. Disaster Nursing in the Future: Responding to a Changing Society and Planet. WKC Forum: Advancing Health and Resilience for emergencies and disasters: Interdisciplinary Collaboration Towards 2030 and Beyond / WHO Centre for Health Development (WHO Kobe Centre) WSDN 2024. JICA Kansai (Kobe, Hyogo). Online. 29 November 2024.

学会発表・学術報告等

林 耕次. 2024. 「バカ・ピグミーの月経とその対応：カメルーン南東部の定住集落と森林キャンプにおける事例より」第89回日本健康学会・東京大学. 2024年10月13日.

Kameya, Y., Sai, A., Yamauchi, T. 2024. Barriers to Menstrual Health and Hygiene among Female Students in the Slum Areas of Yaoundé, Cameroon: Challenges in Sanitation, Education, and Policy Awareness. International Society for Sanitation Studies Annual Conference 2024 / International Society for Sanitation Studies (ISSS). Online. 26 November 2024.

Kameya, Y., Sai, A., Yamauchi, T. 2024. Assessing Menstrual Health and Hygiene Among Female Students in Yaoundé, Cameroon. The 2nd International Cameroon and Japan Workshop: Water, Sanitation and Hygiene and Menstrual Health in urban slums and indigenous communities in Cameroon. University of Yaoundé 1 (Yaoundé, Cameroon). 23 August 2024.

Norimatsu, H., Negayama, K., Kimura, M., Cochet, H., Solomiac, S., Murakami, M., Soucas, R., Cayron, J., Takada, A. 2024. Comprehension et production de l'Humour chez les enfants ages de 0 a 6 ans: comparaison franco-japonaise. Paper presented at Symposium 3: "Comparative cognition and development", 53eme colloque de la Societe Francaise de l'Etude du Comportement Animal, Albi, 22-24 May 2024 (22nd May).

Nyambe, S., Sai, A., Yamauchi, T. 2024. Introduction of Team Sanitation and Health. International Society for Sanitation Studies Annual Conference 2024 / International Society for Sanitation Studies (ISSS). Online. 26 November 2024.

Nyambe, S., Sai, A., Yamamoto, R., Kameya, Y., Yamauchi, T. 2024. Exploring Cultural Beliefs and Practices Affecting Menstrual Health and Hygiene: A Foundational Study for Evidence-Based Interventions. International Society for Sanitation Studies Annual Conference 2024 / International Society for Sanitation Studies (ISSS). Online. 26 November 2024.

Nyambe, S., Yamauchi, T. 2024. Project Highlight for 2.5 years of research in Zambia, Botswana, and South Africa. Co-creating a Community-based Water, Sanitation and Hygiene Model with children and youth (CO-CO WASH) Workshop. The Pearls Hotel and Conference Centre, Umhlanga (Durban, South Africa). 17-20 September 2024.

Sai, A., Hamidah, U., Sintawardani, N., Yamauchi, T. 2024. Fear and avoidance of sanitation workers: Stigmatization and coping strategies among urban-slum garbage workers. International Society for Sanitation Studies Annual Conference 2024 / International Society for Sanitation Studies (ISSS). Online. 26 November 2024.

Sai, A., Mifune, R., Yamauchi, T. 2024. Indigenous Menstrual Health and Hygiene: A Review and Case Study in the Hunter-gatherers' Community in Cameroon. Hokkaido-Melbourne Joint

Research Workshop "Co-creation of Women's Health: Enhancing Global Menstrual Health and Hygiene". The University of Melbourne (Melbourne, Australia). 29-30 October 2024.

Sai, A., Yamauchi, T. 2024. Indigeneity in hygiene attitude and behavior among Baka hunter-gatherers in Cameroon: Elucidating sense of belonging through "open defecation". The 2nd International Cameroon and Japan Workshop: Water, Sanitation and Hygiene and Menstrual Health in urban slums and indigenous communities in Cameroon. University of Yaoundé 1 (Yaoundé, Cameroon). 23 August 2024.

高田 明. 2024. 「シングルショット動画の可能性：相互行為分析の視点から」フォーラム：シングルショットという探究. 日本アフリカ学会第61回学術大会. 大阪大学. 2024年5月19日.

高田 明. 2024. 「社会的距離と感情：グイ／ガナの場所をめぐる物語りの分析から」シンポジウム：情動と仮想空間—感覚を通じた距離と共在の再考. 京都大学. 2024年1月27日.

Tanaka, A. 2024. Childcare among the Baka hunter-gatherers in southeastern Cameroon. 124th KUASS: Wildlife and Local Knowledge in Central Africa. Kyoto university. 29 October 2024.

Yamauchi, T. 2024. Research history in Cameroon (1996-) and future collaboration on WASH and MHH research. The 2nd International Cameroon and Japan Workshop: Water, Sanitation and Hygiene and Menstrual Health in urban slums and indigenous communities in Cameroon. University of Yaoundé 1 (Yaoundé, Cameroon). 23 August 2024.

Yamauchi, T., Sai, A., Nyambe, S., Zaman, M. N. U., Sambo, J., 2024. Co-creation of Women's Health: Enhancing Global Menstrual Health and Hygiene. Hokkaido-Melbourne Joint Research Workshop "Co-creation of Women's Health: Enhancing Global Menstrual Health and Hygiene". The University of Melbourne (Melbourne, Australia). 29-30 October 2024.

Yamauchi, T., Hagino, I. 2024. Little Foragers: Exploring the Active Role of Pygmy Hunter-Gatherer Children in Food Acquisition. 23rd EAA Congress -16th ISGA Congress - SSHB Congress. University of Zagreb, Faculty of Kinesiology (Zagreb, Croatia). 5 September 2024.

山内太郎. 2025. (パネルディスカッション登壇) 第3回「排泄の自然誌を編む」研究会 循環の中の排泄物／信州大学理学部生物学コース進化人類学分野. 信州大学理学部（長野県松本市）. 2025年1月8日.

山内太郎. 2024. 「グローバルサウスの地域社会における環境・社会・健康問題の解決に向けた超学際的アプローチ」これからのTD研究を考える／SRIREPプロジェクト＋北海道大学大学院文学研究院笹岡正俊研究室. 北海道大学人文社会科学総合教育研究棟（北海道札幌市）. 2024年10月15日.

Yasuoka, H., Hongo, S. 2024. Harvest-based monitoring for cooperative wildlife management between local people and conservation actors in the Congo Basin Forests. The 18th International Society of Ethnobiology (ISE) Congress. Cadi Ayyad (Qazi Ayyaz) University (Marrakech, Morocco). 11-14 May 2024.

Yasuoka, H., 2024. Is R/B Monitoring local knowledge? If yes, what is local knowledge? 124th KUASS: Wildlife and Local Knowledge in Central Africa. Kyoto University. 28-29 October 2024.

受賞 / 関連イベント

受賞

原田英典「京都大学アカデミックデイ大賞」

「研究者と立ち話」部門にて一般参加者を対象に発表した「水・衛生でアフリカ都市スラムの下痢を防ぐ」に対して、京都大学アカデミックデイ事務局より授与されました。(2024年11月2日)

子育ての生態学的未来構築コロキウム

第8回 2024年11月15日(金)

対面・Zoomによるオンライン開催(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

Restructuring Ethnicity, Gender, and Ecological Knowledge in the Contact Zones of Namibia



講演者: **Mayu Watanabe** (Kyoto University, Japan)

“Pastors’ Gender Perspectives in Evangelical Lutheran Church in Namibia (ELCIN): From Two Feminist Ideologies”

講演者: **Hu Elsa** (Kyoto University, Japan)

“Old wisdom and essential foods: Discovering the food scenes of Ovambo single-mother household”

講演者: **Simon Hangula** (Ministry of Environment, Forestry, and Tourism, Namibia)

“The ecological mechanisms causing landscape ecological fragments formations: Application of Remote Sensing and GIS mapping in Namibia”

講演者: **Yuichiro Fujioka** (Kyushu University, Japan)

“Ondombe as cultural landscape: A monograph of seasonal wetlands utilization by Ovambo people in north-central Namibia”

講演者: **Mattia Fumanti** (University of St Andrews, UK)

“The Otavi mine company lets its sick workers starve’: Madness and well-being in the colonial mines”

講演者: **Kleopas Nghikfelwa** (Museum and Art Project Coordinator, Namibia)

“Bridging the San, Aawambo, and Christian cultural heritage: The life and achievements of Nghikfelwa Sakaria”

講演者: **Romie Nghitevelekw** (University of Namibia) and **Martha Akawa** (University of Namibia)

“Indigenous ecological knowledge for climate early warning and preparedness in northern Namibia”



第9回 2025年1月16日(木)

128th KUASS (Kyoto University African Studies Seminar) 共催

対面・Zoomによるオンライン開催(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

講演者: **Haneul Jang** (Institute for Advanced Study in Toulouse, France)

“Women’s cooperation in foraging and childcare among the BaYaka hunter-gatherers in the Republic of the Congo”



関連イベント

第10回 2025年2月19日(水)

129th KUASS (Kyoto University African Studies Seminar) 共催

対面 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

Environmental History in Southern Africa



講演者: Dr. Maohong BAO (Specially Appointed Professor, Center for Global History, Osaka University / Peking University)

“The environmental history of gold mining in South Africa: Focusing on environmental racism”

講演者: Dr. Ndapewa Fenny Nakanyete (Lecturer of Human Geography, Department of Environmental Science, University of Namibia)

“The transformation of socio-economic relationships between the San and Ovambo people since the mid-1950s”

討論者: Dr. Yanyin ZI (Assistant Professor, College of Intercultural Communication, Rikkyo University)

129th KUASS (Kyoto University African Studies Seminar)
The 10th Colloquium of Ecological Future Making of Childrearing
Environmental History in Southern Africa

Dr. Maohong BAO
 Specially Appointed Professor
 Center for Global History, Osaka University
 Peking University

**The environmental history of gold mining in South Africa:
 Focusing on environmental racism**

Dr. Ndapewa Fenny Nakanyete
 Lecturer of Human Geography
 Department of Environmental Science
 University of Namibia

**The transformation of socio-economic relationships
 between the San and Ovambo people since the mid-1950s**

PROGRAM

14:00-14:05 Introduction by Dr. Akira Takada
 (Professor, ASAFAS, Kyoto University)

14:05-15:05 Presentation by Dr. Maohong BAO

15:05-15:15 Short break

15:15-16:15 Presentation by Dr. Ndapewa Fenny Nakanyete

16:15-17:00 Discussion by Dr. Yanyin ZI (Discussant, Assistant Professor,
 College of Intercultural Communication, Rikkyo University)

Wednesday, February 19, 2025
 14:00-17:00 (JST)

Large-sized Meeting Room
 3F, Inamori Foundation Memorial Hall
 Kyoto University

**THE CENTER FOR AFRICAN AREA STUDIES
 KYOTO UNIVERSITY**
 88 Yamanote-Chonomachi, Sakyo-ku, Kyoto, 606-8501
 Inamori Foundation Memorial Hall, Kyoto University

TEL: +81-75-753-7800 / 7802
 FAX: +81-75-753-7803 / 7810
 E-mail: center@aas.kyoto-u.ac.jp
 https://www.aas.kyoto-u.ac.jp/

CCI データセッション

第118回 2024年11月16日(土)

対面 (筑波大学東京キャンパス)

発表者: 高木智世 (筑波大学)

「日本語のインタラクション」

第119回 2025年2月1日(土)

対面 (静岡大学人文社会科学部)

発表者: 彭宇潔 (静岡大学), Haneul Jang (Institute for Advanced Study in Toulouse)、田中文菜 (京都大学)

コメンテーター: 高田明 (京都大学)

「狩猟採集民の集団活動について: Baka と BaYaka との比較」



CCI ショートトーク

第7回 2025年1月14日(火)

対面・Zoomによるオンライン開催 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

講演者: 林耕次 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

「紙芝居を使った衛生意識の醸成 (バカ・ピグミー、カメルーン)」

事務局より

Newsletter の第 4 号をお届けします。特集記事として、研究分担者の Matthew Burdelski さん、川島理恵さんのインタビュー記事を紹介しました。

2024 年 11 月にシンポジウム “Restructuring Ethnicity, Gender, and Ecological Knowledge in the Contact Zones of Namibia” が、2025 年 2 月にシンポジウム “Environmental History in Southern Africa”

が開催され、活発な議論が行われました。2025 年 1 – 2 月には、コンゴ共和国で狩猟採集民バヤカについて研究されている Haneul Jang さん（トゥールーズ先端研究センター研究員）が 1 カ月半 ASAFAS で研究されました。

表紙を語る



本プロジェクトの主要な調査サイトの 1 つであるボツワナのコエンサケネ（行政地名はニューカデ）は、幹線道路から中央カラハリ動物保護区 (CKGR) に向けて 100km ほど入ったところにあります。その途中の道は近年徐々に整備されてきていますが、依然として舗装されていないグラベルロードが長く続き、道の両脇にはブッシュが広がっています。路上には優雅な動きでカラハリの地を闊歩するダチョウもときおり姿を見せます（表紙の写真参照）。この若いオスのダチョウの目にグラベルロードはどう写っているのだろう、そんなことを考えながらしばらくトヨタのハイラックスで併走しました。

コエンサケネに着くと、ガイやガナの住人がまた暖かく出迎えてくれました。道すがらダチョウを見たよと伝えると、写真は撮ったかと尋ねられました。ガイ／ガナでは、ダチョウを初めとする野生動物は狩猟の獲物となってきました。しかし昨今では、観光客を魅了するための資源としての側面も強く意識されるようになってきています。最近になってコエンサケネに設けられたクラフト・ショップに入ると、ガイ／ガナでは豊穡の象徴となってきたエランドの可愛らしい置物が売られていました（裏表紙の写真参照）。

コエンサケネへの道にて
ダチョウと併走
2024 年 8 月 10 日撮影
撮影者：高田 明

本プロジェクトウェブサイトのお知らせ

アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築



<https://www.cci.jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/efm/>



コエンサケネのクラフトショップにて、エランドの置物（2024年8月14日）撮影者：高田明

Newsletter no.4

February 2025

2025年2月28日発行

編集・発行：高田明（研究代表）

E-mail: cci.takada.lab@gmail.com

